

## 栄一と富岡製糸場

殖産興業を進める明治政府は、明治3年（1870年）、貿易による外貨獲得のため、模範的な洋式製糸工場の建設を計画しました。富岡製糸場設置主任の栄一らの主導のもと、尾高惇忠が創立責任者に任命され、またフランス人技師ポール・ブリュナを建設技術者に迎え、現在の群馬県富岡市に建設が進められました。2年後に富岡製糸場が完成すると尾高惇忠は初代の場長となりました。

平成26年、「富岡製糸場と絹産業遺産群」は世界文化遺産に登録されました。



錦絵 上州富岡製糸場之図（富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館所蔵）

## 栄一の雅号「青淵」の由来

栄一の生地「中の家」の近くに「上の淵」と呼ばれる青々とした水をたたえた淵があったことにちなみ、尾高惇忠により「青淵」と命名されました。

## 栄一とレンガと深谷市

栄一は明治20年に日本煉瓦製造会社を設立し、翌年上敷免に工場をつくり、日本煉瓦製造会社で製造されたレンガは、明治時代の代表的な建築



JR深谷駅

である司法省（現法務省）・日本銀行・迎賓館赤坂離宮・旧東京裁判所・旧警視庁・東京駅などに使われ、日本の近代化の象徴となります。これを縁として、JR深谷駅は東京駅を模した駅舎となっています。栄一ゆかりの大正時代の名建築物である誠之堂（国重要文化財）にも使われました。

## 煮ぼうとう

深谷の郷土料理「煮ぼうとう」。手打ちの平麺にネギや大根、にんじんなどの野菜がたっぷり入った、しょうゆ味の麺料理です。

栄一も帰郷の際に好んで食べました。



## 今注目される渋沢栄一

近代日本経済の礎を築いた渋沢栄一。2021年には栄一を主人公とする大河ドラマ「青天を衝け」が放送、また、栄一は2024年に発行の新一万円札の肖像にもなります。

西暦	年齢	主なできごと	備考
1840		天保11年2月13日、武蔵国榛沢郡血洗島村（現深谷市）に市郎右衛門、えいの子として生まれる	アヘン戦争
1858	18	尾高惇忠の妹、千代と結婚	日米修好通商条約締結
1863	23	高崎城乗っ取り、横浜外国商館焼き打ちを計画するが、尾高長七郎（惇忠の弟）の説得により中止。京にのぼる	世界初の地下鉄開通
1864	24	一橋家の用人平岡四郎のはからいで渋沢喜作とともに一橋家に仕官する	
1867	27	将軍徳川慶喜の弟昭武に従いフランスのパリ万博に随行	大政奉還
1868	28	フランスより帰国。一時静岡藩に仕え、商法会所を設立	明治に改元
1869	29	明治政府に仕官。租税正となり、改正掛長を兼務	版籍奉還
1870	30	官営富岡製糸場設置主任となる	
1873	33	大蔵省を辞任し、第一国立銀行総監役となる	地租改正
1874	34	養育院の事務をつかさどる	台湾出兵
1882	42	妻千代死去	日本銀行開業
1883	43	伊藤兼子を妻に迎える	
1885	45	東京府の経営廃止条例の決定により、養育院の存続に努力する	伊藤博文初代内閣総理大臣
1888	48	上敷免村（現深谷市）に日本煉瓦製造会社の工場開業	
1900	60	男爵を授けられる	
1901	61	日本女子大学校開校。会計監督となる	
1902	62	アメリカ及びヨーロッパ諸国を兼子夫人と共に訪問し、国際親善につとめる	日英同盟
1909	69	渡米実業団の団長としてアメリカに渡る	
1914	74	中日実業株式会社の創立を機に中国を視察し、親善につとめる	第一次世界大戦
1916	76	実業会から引退し、社会公共事業に尽力する 血洗島諏訪神社に拜殿を寄進する	
1920	80	子爵を授けられる	国際連盟成立
1921	81	ワシントン軍縮会議の視察をかねて渡米し、平和外交を促進する	
1923	83	関東大震災が起り、大震災善後会副会長となる	
1927	87	日本国際児童親善会長として、日米の人形の交換につとめる	日本初の地下鉄開通
1929	89	宮中に参内、単独御陪食の光栄に浴する	世界大恐慌
1931	91	11月11日永眠	満州事変

**渋沢栄一記念館** 深谷市下手計1204 花園ICから約15km  
Tel. 048-587-1100 深谷駅から約6km

**渋沢栄一 青天を衝け 深谷大河ドラマ館** 花園ICから約11km  
深谷市仲町20-2 Tel. 048-551-8955 深谷駅から約1.5km  
開館期間 2021年2月16日～2022年1月10日（予定）

# 近代日本経済の父 渋沢栄一 Shibusawa Eiichi



2021年大河ドラマ「青天を衝け」主人公

## 埼玉県深谷市

<http://www.city.fukaya.saitama.jp/>

## 近代日本経済の父 渋沢栄一

渋沢栄一（雅号「青淵」）は、天保11年（1840年）現在の深谷市血洗島の農家に生まれました。父親からは勤勉さ、人への思いやりを、母親からは慈悲のこころを学びました。母「えい」は大変慈悲深い人で、栄一は母の愛情をいっぱいを受けて育ちました。母は近所の人にも優しく、病弱な人の着物や食事の世話までしました。のちに栄一が社会福祉事業に熱心に取り組んだのはそんな母親の影響があったのでしょう。

また、いとこの尾高惇忠（雅号「藍香」）から「論語」をはじめとした学問を学ぶとともに尊王攘夷思想の影響を受けました。23歳のころ、幕藩体制に疑問を抱き拳兵を企てますが、中止して郷里をあとにします。その後一橋家及び幕府に仕え、慶応3年（1867年）、第15代将軍徳川慶喜の名代徳川昭武に随行して渡欧しました。約一年半滞在中で、ヨーロッパの進んだ社会制度・思想・文化などを目の当たりにし、大きな影響を受けました。

明治元年（1868年）11月に帰国した後、静岡に商法会所を設立したところ、大隈重信の説得により明治政府に租税正として迎えられ、様々な制度の企画・立案に当たります。明治6年（1873年）大久保利通らと財政運営で意見が合わず辞職し、第一国立銀行を設立するなど実業界で活躍しました。「論語」の精神を重んじ「道德経済合一説」を唱え、各種産業の育成と多くの近代企業の確立に努め、第一国立銀行をはじめ設立・育成に関わった企業は500余に及びました。

また、600以上の社会福祉事業や教育に関わるとともに、昭和6年（1931年）に亡くなるまで、国際親善にも貢献しました。

## 実業家の出発点

栄一の家は農業、養蚕のほかに藍玉を製造していました。藍の葉を仕入れて、藍玉という染料のもとにして売ります。栄一もよく父親の供をして藍葉の仕入れや得意先まわりに出ていました。栄一が14歳の時、栄一と祖父とで買出しにでかけましたが、生意気ざかりの栄一は祖父を残し、一人で買い付けに行きました。

最初は栄一を相手にしなかった農家の人たちも、「この葉は肥料が足りないね。これは乾燥が不十分だね。」と言う大人顔負けの鑑識眼に驚き、栄一は上質の葉を安く仕入れました。

## 倒幕から幕臣へ

江戸時代には、御用金と称して、領主が富裕な領民に金を供出させること



パリ万博使節団一行\*

がたびたび行われていました。栄一が17歳の頃、富農であった渋沢家は、岡部藩から500両の御用金を差し出すよう申しつけられました。父親の代わりとして代官所に出頭した栄一は、役人のごう慢な態度に正論で対抗しました。この時のやりとりから「侍が威張るのは、結局は幕政が悪いからだ、階級制度が間違っているからだ。」と憤慨します。こんな体制への反発が栄一を「倒幕」の意識に駆り立てていくのでした。

栄一は、隣村の知識人で10歳上のいとこ尾高惇忠、惇忠の弟である長七郎、いとこの渋沢喜作らとともに、高崎城を乗っ取り、横浜外国商館を焼き打ちするという計画を立て準備をはじめました。しかし長七郎が京都での見聞から反対し、結局この計画は中止となりました。

栄一は23歳の時、喜作とともに、世の情勢を探るため京都に向かいました。元治元年（1864年）、かねてより懇意だった一橋家の重臣、平岡円四郎の勧めで一橋慶喜（後の15代将軍徳川慶喜）に仕官することになり、歩兵の募集、財政の改革、新しい事業の運営など頭角をあらわしていきます。

## ヨーロッパ派遣



断髪洋装姿の栄一\*

慶応3年（1867年）、栄一は、パリ万国博覧会に招待され将軍の名代として参加する徳川慶喜の弟、徳川昭武の使節団に庶務・会計係として随行しました。

好奇心旺盛な栄一は、ヨーロッパに滞在中にチョンマゲを切り、洋装に変え、議会・取引所・銀行・会社・工場・病院・上下水道などを見学しました。進んだヨーロッパ文明に驚き、また、人間平等主義にも感銘を受けました。

このヨーロッパを見聞した経験が、栄一の人生を大きく変えたのです。

## 官界から実業界へ

明治元年に帰国した栄一は、徳川慶喜の謹慎する静岡藩へ行き合本（株式）組織の「商法会所」を設立しました。翌年には明治政府の高官大隈重信の説得で明治政府に迎えられ財政をはじめ様々な制度づくりに取り組みました。しかし、官界の硬直した体制に限界を感じた栄一は明治6年に大蔵省を辞め、実業界へ転進し、第一国立銀行をはじめ約500社の企業の設立・育成に関与しました。

栄一の生涯を通じての基本理念は「論語」の精神にあり、単なる利益追求ではなく、「道德経済合一」による日本経済の発展でした。ここに実業界の指導者としての栄一の偉大さがあるのです。

## 慈悲のこころ 社会福祉活動

栄一は社会福祉事業にも熱心でした。明治7年（1874年）、東京府からの要請で、

身寄りのない子どもや老人を介護するための施設である「養育院」に関わり、以来91歳の天寿をまっとうするまで50年以上にわたり養育院の院長を務めました。また、「埼玉育児院」、「滝乃川学園」など児童福祉施設の設立・運営や「救護法」の制定などにも力を尽くしました。

教育にも力を入れ、東京商法講習所（現一橋大学）の経営にも尽力しました。また、日本女子大学校（現日本女子大学）の創立委員にもなりました。

栄一は医療施設の整備にも情熱を燃やし、東京慈恵医院（現東京慈恵会）、恩賜財団済生会、聖路加国際病院、日本結核予防協会などの設立と運営にも関わりました。



養育院巢鴨分院を訪問された高松宮殿下とともに\*

## 国際親善にも尽力

日米関係の悪化に心を痛めていた栄一に、アメリカから、人形による国際交流を行い日米友好を図りたいという提案がありました。栄一は日本政府へ協力を働きかけるとともに「日本国際児童親善会」を組織し、アメリカ側から約13,000体の「青い目の人形」を受け入れました。この人形は全国各地の小学校へ送られ、大歓迎を受けました。



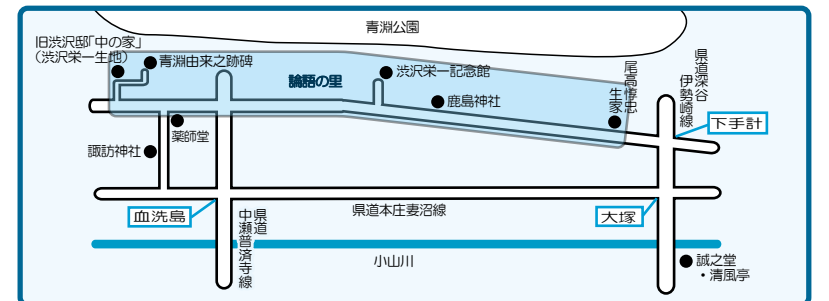
青い目の人形を抱く栄一\*

そして、返礼として58体の日本人形がアメリカへ贈られました。現在「青い目の人形」は埼玉県内の小学校などに12体（全国で300体以上）が保存されています。

また、栄一は第18代アメリカ大統領グラント、救世軍ウィリアム・ブース、中国の政治指導者孫文など、世界の著名人も親交がありました。

## 論語の里

栄一は、幼少の頃から「論語」を学び、生涯を通して親しみました。初め父親の渋沢市郎右衛門に学びましたが、7歳頃から尾高惇忠に習うようになりました。栄一が「論語」を習いに通った「中の家」と尾高惇忠生家の周辺には栄一にゆかりのある史跡等が数多く残されており、一帯を「論語の里」と呼んでいます。



※ \*印の写真は「渋沢史料館」所蔵